

下岡蓮杖とブラウンの周辺の写真について

慶應義塾大学 准教授 高橋信一

上野彦馬と並ぶ写真の開祖下岡蓮杖もいつごろから誰に写真術を学び、どういう経緯で横浜に開業したのか、判然としていない。そのためか、近頃、S Rブラウンの娘から蓮杖が写真術を習ったなどということ「幕末維新の暗号」にも書かれたりしている。テリー・ベネットも「Photography in Japan」や彼が主宰する「Old Japan(No.34)」のカタログに書いたり、平成19年日本写真協会の国際賞授賞式の講演でも述べている。しかし、私は「フルベッキ写真」を調べる過程でS Rブラウンの行動も高谷道男訳編「S・R・ブラウン書簡集」とその手紙の原文のコピー（明治学院大学所蔵）で調べていて、この件に関しては、極めて懐疑的に思っている。不完全な情報に基づき、確認もしないで風説がまかり通っている例だと考えた。以下にS Rブラウンや彼の娘ジュリア、ブラウンといっしょに来日したフランシス・ホールらの写真術と蓮杖との関係を調べた結果をまとめる。

まず、「写真履歴」で下岡蓮杖が語ったことをおさらいする。1861年に江戸で絵師をしていた蓮杖はウンシン（ウィルソン）の来日を知って、写真術について教えてもらうことにした。しかし、言葉の問題とウィルソンが積極的でなかったため、進歩が捗々しくなかった。同時期に「宣教師の女ラウダ」もウィルソンに習っていたのを知り、発奮した。1861年の暮れにウィルソンが幕府の遣欧使節のカメラマンとして雇われて離日する際に蓮杖は彼から写真機材を購入し、1862年の始めに開業した。しかし、半年経っても満足行く写真が撮れず、苦勞した。そこで、ラウダから情報を得ようとしたが、彼女も帰国した後だった。仕方なく、蓮杖は自力で写真術に本格的に取り組んだと言っている。彼の写真家としての成功にラウダが係わった訳ではない。「写真履歴」の解釈の間違ひがある。「女ラウダ」を娘と考えるか、妻と考えるかは簡単ではない。宣教師S Rブラウンの妻か娘、ジュリアの結婚相手であるジョン・ラウダの父親の妻か娘と4通りの解釈が成り立つ。そのことを前提にして、調査を進める必要がある。

宣教師S Rブラウンと写真術の関係については、彼がオランダ改革派教会本部に宛てた手紙類に見ることが出来るが、その中身については世界的にほとんど知られていないようである。引用する文献がない。1859年6月フルベッキやホール、シモンズ及び彼らの家族らとともに日本に向かったブラウンは、この時点ではまだ写真の技術は持っていなかったが、数ヶ所の教会からカメラや薬品を買う費用を寄付してもらっていて、シモンズに写真を撮らせて本国に送ると約束していた。しかし、来日後シモンズは医者としての使命に目覚めて医師の仕事に専念し、写真を撮ろうとしなかったため、45ドルを出して取り合えず、日本の風景写真を買って、1861年に本国へ送った。この写真はもちろん下岡蓮杖が撮影したものではない。誰が写した写真なのか。1863年6月21日ベアトがワーグマンに案内されて来日する以前に江戸、横浜で写真を撮った外国人は極限られている。ピエール・ロシエは1859年6月26日に江戸へ到着し、1860年2月27日上海に

向けて出発した。その後長崎に戻り上野彦馬に写真術を教えたことになっている。1861年には日本にはいなかった。ウィリアム・ソンドースは1862年8月30日に来日し、後で書くブラウンの手紙にもあるように江戸城などの写真を撮った。スチルフリードは1863年に来日した。1861年にブラウンが送った写真は、1860年に来日した先のジョン・ウィルソンが撮影したものかもしれない(「Old Japan(No.34)」参照)。本論文の最後に述べるが、ウィルソンは成仏寺の本堂前でブラウンやヘボン、シモンズの家族のステレオ写真を撮っている。その後、ブラウンはシモンズからカメラを受け取り独力で書物を読み、写真術の勉強をして自分で写真を撮って、薬品の調達のために本国に送り写真を売った。1862年の夏にミクロネシアで宣教をしているギュリックが来日したので彼から教わって大判の風景写真を撮った。その7枚を7組ずつ焼いて寄付してくれた各教会宛てにハイアットに託して送った。それ以外に、トミー(立石斧次郎)の写真なども撮って送った。以上のことを1862年10月25日付けの手紙で書いている。その中で最近、江戸城や芝増上寺の徳川の墓地を写したと書いている。上記のようにイギリス人の写真家ソンドースもこの時、江戸城内で幕府の武士達の写真を撮っていた。11月8日の手紙でも、この江戸城内での撮影のことが書かれている。城と敷地、城壁、堀などを撮って5、6枚本国に送った。それらも先のハイアットに託された。薬品類はカリフォルニアから買っているがニューヨークより高いので、そちらから送ってくれば、お礼に日本のきれいな写真を送ると言っている。

ブラウンの娘ジュリアは1861年に21歳で日本で結婚している。19歳で来日する前に写真術を学んでいたとしたら、17、8歳で両親でなく誰から教わったのか。カメラを持って来日しなかったことも疑問である。その父親ブラウンは来日後に寄付金で買ったカメラや薬品類をシモンズから受け取って、独力で学んだと言っている。娘から教わっていない。むしろ、娘はブラウンに感化されて後年、カメラに興味を持つに至った可能性がある。ブラウンは娘ジュリアや妻がウィルソンについて写真術を習っているなどと言っていない。下岡蓮杖は1874年に横浜海岸教会に入信し、洗礼を受けている。ブラウンとの付き合いの関係から、開業後、写真の薬品の提供やアドバイスを受けていただけだと思う。蓮杖が写真術を学んだのは1856年ごろ、ペリーの艦隊の乗組員から始まると考えられ、ブラウンが来日したころには相当な技術を会得していたはずである。最も影響を受けたのはウィルソンかもしれない。1862年春の蓮杖の開業は、当時の「横浜奇談」や「JAPAN EXPRESS」に紹介されており、有名な事件だった。ブラウンが、それに貢献したとするのは、上記の手紙の内容からブラウンが人に教える程の技術を1862年始めまでに持っていたとは考えられないので無理である。むしろ、ブラウンが蓮杖から教わったと考えるのが自然であるが、最初に書いたようにこのころ、蓮杖の技能は人に教える程ではなかった。ブラウンは1863年に、それまでの神奈川から横浜の居留地に居を移している。蓮杖との付き合いは、それ以後ではないか。娘だけが先行して蓮杖と接触した記録はない。ブラウンが蓮杖に写真術を教えたというのは、1902年にグリフィスを書いたブラウンの伝記「A maker of the new Orient, Samuel Robbins Brown」(訳本は渡辺省三「われに百の命あらば：中国・アメリカ・日本の教育にささげた S.R. ブラウンの生涯」)に依拠

しているが、十分な情報に基づいたものではないと考える。特に「ブラウンが日本人を撮影した最初の人物。下岡蓮杖は写真術を習った最初の日本人」としているのは、現在の写真技術史の常識に外れた表現である。グリフィスの著作には、「日本のフルベッキ」にしても、数十年前に来日した際の不完全な情報と帰国後に蒐集した膨大な資料を基に現地検証せずに記述されていることが多い。全面的に信用するのは危険である。ベネットの主張するブラウンの娘に関する「Photography in Japan」や彼の「Old Japan No.34」の記述も不確実な証拠に基づいており、以下にそれを検証する。

始めに書いたように、蓮杖について書かれた文献に彼にアドバイスをした人物として「宣教師の娘ラウダ」(斎藤多喜夫「横浜写真物語」)というのが登場する。私は当初、これは、ブラウンの娘のジュリアでなく、当時17歳で彼女を妊娠させた結婚相手のジョン・フレドリック・ラウダの二人の姉妹の誰かであろうと予想した。「S・R・ブラウン書簡集」によれば、ジョンの実父は上海のイギリス領事館付きの牧師であったが、赴任して1年余りで海で溺死し、母ミセス・ラウダと三人の息子と二人の娘を残した。彼らは1861年に来日して、ジョンは1862年1月に前年暮れに結婚したジュリアと函館のイギリス領事館へ赴任した。ジュリアは結婚した時点で身重だった。いつ蓮杖のカメラの前に立ったというのか。ジョンの実母(Lucy Lowder)は1862年3月に横浜を出航、イギリスに帰り7月に前イギリス全権公使のオールコックの後妻になった(ラザーフォード・オールコック「The Capital of the Tycoon」、訳本「大君の都 - 幕末日本滞在記 -」)。実は、最近になってベネット氏の努力下、ジョンの父が亡くなった後、娘二人はイギリスに送られており、1861年の時点では、二人はイギリスにいたことが判明した。つまり、「宣教師の娘」はジョンの姉妹ではないことが明らかになった。

そこで、繰り返しになるが、明治27年の「写真事歴」に掲載された山口オー郎による下岡蓮杖からの聞き書き(「日本思想体系17 美術」)によれば、文久元年、蓮杖はウィルソンから写真術を学んでいたが、言葉の問題で難渋していた。この年の暮れにウィルソンが遣欧使節団と欧州に向けて離日する際に写真機材を購入し、文久2年の始めに開業した。しかし、半年経っても薬の調合などで苦労していた。ウィルソンには宣教師の女ラウダがついて勉強していたので、彼女に聞こうと思ったが、帰国した後だった。それで、発奮して独力で工夫を重ね、写真術を会得した。蓮杖はラウダがウィルソンと同国人と言っているが、アメリカ人とイギリス人の区別がついていなかった。ジュリアが結婚してラウダ夫人となったことを知っているなら、アメリカに帰国したのでなく、函館に行ったことを知らないはずはない。ジュリアは国内を夫とともに絶えず移動し、イギリスやアメリカにも行っているが、生涯を日本で終えたのであって、1862年当時、身重でアメリカに帰ってはいない。彼女の両親は日本にいたのである。ジュリアの消息を知らないのなら、ラウダと呼ばず、ブラウンと呼んだはずである。蓮杖の言うことには矛盾が多い。

こうして、情報の混乱が起こったのである。誰も取り上げていないが、宣教師ラウダの妻ミセス・ラウダが上海在住中に写真を趣味にしていたことを否定することは現在のところ

る出来ないし、来日後ウィルソンに教えを受けたかどうかは未確認である。蓮杖はラウダがウィルソンから写真術を教わっていたと言っている。明治学院大学所蔵の翻訳されていないSRブラウンの手紙の残り半分も原文で読んでみたが、ブラウンが自分で家族や日本の風景を撮影して本国に送ったことが、1862年以降何回か書かれているが、妻やジュリア及び蓮杖について、写真に関係した文章が書かれている手紙はなかった。「宣教師の女ラウダ」がジュリアである根拠は存在しない。

さらに「ブラウンの娘から下岡蓮杖がアドバイスを貰った」件についてベネットが根拠にしている情報は先の斎藤氏の著作及びフランシス・ホールの日記「Japan Through American Eyes 1859-1866」とその編纂者ノートヘルファーの推測だが、こちらにも1860年の時点で、ジュリアやホールやブラウン自身が写真家であったとする記述はない。ジュリアとホールは、このころよく神奈川の近辺を馬に乗って散策に出かけているが、写真を撮ったという記述はない。当時、屋外で写真を撮るには相当の準備が必要であったから、写真を撮っていたら、日記に必ず記載したはずである。ホールはこの年、写真に興味を持って自分も住まいにしている宗興寺のシモンズの家へ何度も行って写真術を習っていたが、1861年4月27日に撮影に失敗して以後、写真に興味を失ったようで、以後写真についての記述はない。この時、カメラ機材がブラウンに渡ったためであろう。ウィルソンがラウダに教えたのは、その後のことであり、ホールの日記に根拠を求めるのは無理がある。

グリフィスが1902年ころブラウンの伝記を出版する際に、当時の写真についてホールに問い合わせた手紙の1901年5月3日の返信に「ジュリアがアマチュア写真家である」と書かれていたことを、編纂者ノートヘルファーは根拠としているようだが、これをもって1860年代の始めにジュリアが写真家だったというのは暴論である。ホール自身も手元に関係する写真がないと言っている。シモンズが写真を撮って本国に送らないので、カメラをジュリアに渡して写真の勉強をさせたのでは、とも編纂者は言っているが、単なる推測に過ぎない。前に書いたように、ジュリアの父親SRブラウンの手紙（「S.R.ブラウン書簡集」）によれば、彼は1861年になってシモンズのカメラを使って独学で写真の勉強を始め、1862年の秋にようやく満足な写真が撮れるようになったのであって、ジュリアが来日前の17、8歳から元々写真について知っていて、父ブラウンに教えた訳でもない。ジュリアもホールと同様にシモンズから習っていたなら、どうして蓮杖はシモンズから教わらなかったか。先に述べたように、ラウダはウィルソンから写真術を習っていた。ラウダがジュリアなら、ホールもウィルソンから習うチャンスはあったはずである。しかし、ホールの日記にはウィルソンは登場しない。以上、「宣教師の娘」と解釈するのが、そもそも無理である。ジュリアなら、「宣教師の女ブラウン」でなければならない。ホールもジュリアをミス・ブラウンと呼んでいる。ジョン・ラウダの父親は上海の牧師で、海で溺死したために、一家で日本に来て、母親は1862年にイギリス領事のオールコックとイギリスに帰国し再婚した。これは蓮杖の証言と一致する。Oxford Dictionary of National Biographyによると、ジョンの父親ラウダの娘の一人はAmy, Henrietta Lowderといい、1878年にLewis, Pellyと結婚したと記録されている。もう一人の娘とともに、1861

年にはイギリスに住んでいた。現時点では「宣教師の女ラウダ」はルーシー・ラウダである可能性が最も高い。

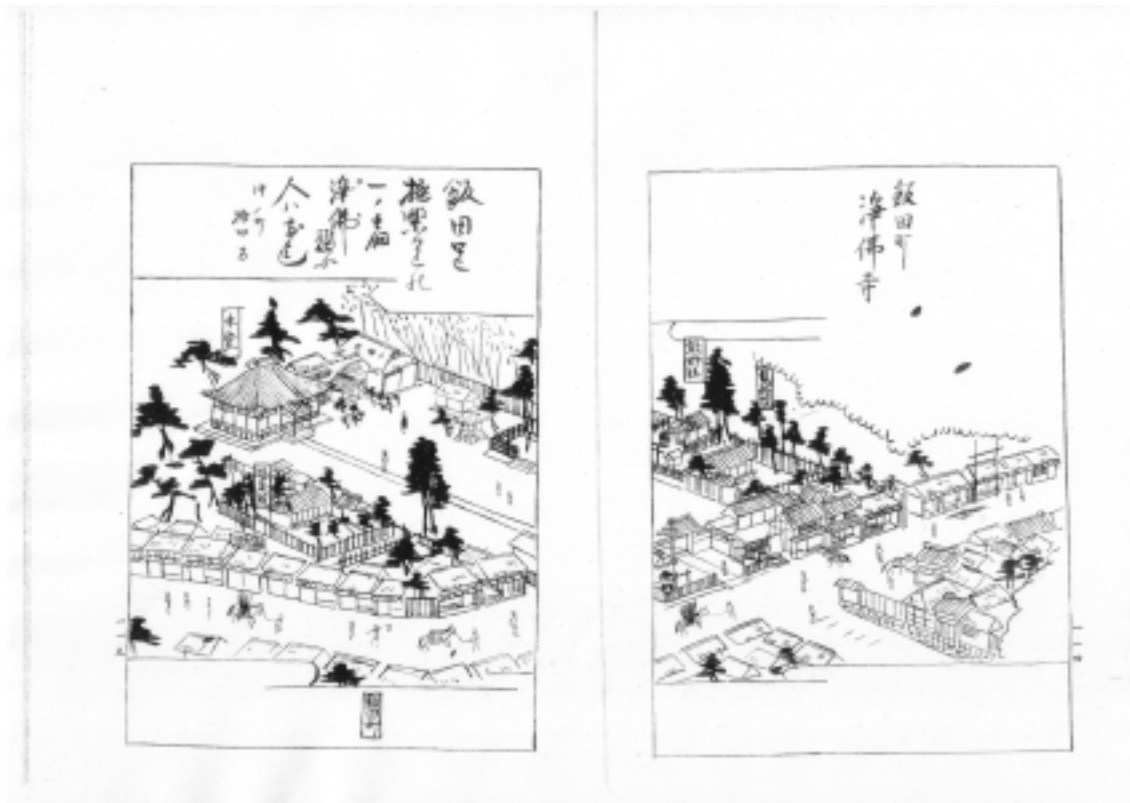


DR. BROWN'S TEMPLE HOME.

次にシモンズから習ったホールが撮ったと主張されているS Rブラウンの神奈川での住居の写真の真偽を調査する。この写真でいう「成仏寺」はヘボン、ブラウン、バラらが住んだ所で、彼らに関する文献類に必ず取り上げられている写真だが、そもそもの出所はグリフィスで、先に挙げた1902年のS Rブラウン伝に最初に掲載された。ホールの日記の編纂者ノートヘルファーはホールから1901年5月にグリフィスに送られたものとしているが、グリフィス自身は情報源を明らかにしていないので、確証はない。これに関しても極めて疑問があるが、誰も検証していなかった。その疑問の根拠は、先ず、写っている門と奥の大きな家屋の屋根が茅ぶきになっていることである。この写真はS Rブラウンらが住んでいた1860年当時の写真では有り得ない。「ヘボン書簡集」に、ヘボンは「本堂はみごとな瓦屋根を持っている」と書いている。ヘボンが1859年11月22日に米国長老教会海外伝道会事務局長宛てに送った手紙の原文の一部を紹介する。高谷道男氏が「ヘボン書簡集」出版の前、1955年にまとめた「The Letters of Dr. J. C. Hepburn」に掲載されている。海外では「ヘボン書簡集」は知られているが、こちらはほとんど知られていない。辛うじて、ヘボンが関係したラトガース大学とプリンストン大学が所蔵している。これは高谷氏がタイプしたものではなく、長老教会のネイティブの事務員がタイプしたコピーを日本に送って来たもので、手書き原文と比べても疑問の余地はない。

We were given the choice of three temples. I selected the one we are now living

in as in many respects the most desirable, on account, especially, of its location & size. The buildings consists of the Temple proper, and the house occupied by the priests. I selected the Temple as my dwelling, it being smaller, in better repair, more compact and admitting of being arranged inside to suit our habits and tastes. It has a good tile roof, is built on pillars about 4 feet from the ground, to the floor with a free circulation of air between.



また、バラの夫人マーガレットが残した手紙「古き日本の瞥見 (Glimpses of old Japan)」には「大きなどっしりした門、敷き石の広い歩道が通じているいくつもの建物、広い庭、本堂より大きい庫裏 (住職の住居)、本堂には精巧な彫刻、芸術的な装飾があり、絵のような美しさ」と書かれている。文政6年 (1823年) に書かれた「神奈川駅中図絵」および1824年に書かれた「金川砂子 (かながわいさご)」中の成仏寺の境内の絵図を見ると、門と本堂の屋根は瓦ぶきになっていて、庫裏は茅ぶきである。門の近くに大きな銀杏の木が一本立っているが、このことはグリフィスのヘボン伝 (「Hepburn of Japan」、佐々木晃訳「ヘボン：同時代人の見た」) の中に引用されているバラの娘の言葉と一致する。ホールの写真にあるような門のところには、木が繁る余地はない。もはや、ホールの写真が1860年当時の成仏寺ではなかったことは明らかである。ホールがグリフィスに送ったのなら、成仏寺の写真だとは言わなかったはずである。彼は当時の成仏寺の姿を知っているからである。結果的に送れなかったと解釈出来る。

次の問題は、ホールが撮ったと間違って解釈された写真は何の写真だったのかである。

グリフィスは私の今までの経験でもいろんな所で勘違いや間違いをしていて、現地での検証を怠っている。今回のも、その一つだと考える。その手懸かりは、写真に写る文字にある。右の門柱には「説教所」の看板が下がっているが、これは、その場所が寺院そのものではなく、寺社の出先機関であることを示している。一種の集会所であり、僧侶や神官が出向いて説法を行うための場所である。通常は民家を借りて作られた。浄土真宗、日蓮宗などの仏教だけでなく、伊勢神宮の説教所は多くあった。寺院に昇格する例はかなりあったようだが、何百年も続いた成仏寺というれっきとした寺に説教所の看板が掲げられることは有り得ない。邪蘇教説教所（神奈川教会の前身）は明治8年に設立されたことになっている。禁制の高札が撤去され、キリスト教の布教が正式に解禁になったのは明治6年（1873年）で、1860年代に自由な布教活動は出来なかったはずである。また、邪蘇教だと、ただ「説教所」としてもだれにも何の説教所なのかわからなかったと思う。



2007年、斎藤多喜夫氏が編纂した「文明開化期の横浜・東京」にはホールの写真とほぼ同じで別バージョンの「成仏寺」の写真が掲載されている。その元になった「The Far East, Vol.3, No.24(1873年5月17日号)」の説明文を全文示す。

The name of Kanagawa is little known to our distant friends, although it is that of the principal port opened to foreigners in 1859. The government of the Tycoon, however, in making preparation for the reception of foreigners gave them a location on the opposite side of Kanagawa Bay, and their doing so became one of the earliest causes of complaint on the part of foreign ministers. Yokohama became the open port,

and unquestionably it has advantages quite wanting at the town of Kanagawa-but the first residences of the Consuls and of the American missionaries who were among the earliest arrivals, were in various temples at Kanagawa. The picture on page 283 is the view from the Tokaido of that originally occupied by the missionaries who were among the very first arrivals.

この雑誌記者は「米国宣教師たちの最初の住居」と言い、写真が成仏寺であると言っていない。もし万が一、これが明治5年ころの成仏寺だとしてもおかしい。「東海道からの眺め」と書いているが、成仏寺は東海道沿いには面していない奥まった所にあり、東海道の方をを向いてもない。要するに、この写真は1873年の始めにウィーン万博に出かける前までに「The Far East」の専属カメラマンのモーザーが撮影したどこかの民家の写真である。民家なら、「説教所」の表示があってもおかしくはない。掲載当時より、10年も前に神奈川一帯に住んでいた領事館員や宣教師たちが引き払って横浜外人居留地に引っ越した後を、よく調べもしないで紹介した写真である。説明文が、成仏寺だということを保証している訳ではない。前にも述べたように銀杏の大本は写っていない。ホールが撮ったという写真とは写っているものが人物以外全く同じなので、同じ日に同じ場所で、同じアングルで撮影されたものだったと結論出来る。どちらも、1866年にホールが米国に帰国する以前の写真ではないことが、これではっきりしたと思う。「The Far East」に使われるには、日本にネガが残っていなければならない。10年間ネガ湿板が何処に保管されていたというのか。実際は、グリフィスは1874年まで日本にいて、この「The Far East」を買い、この写真とキャプションを見て成仏寺だと勘違いしたのである。後にホールから写真をもったのではない。「The Far East」は誌面に直接生写真を貼り付けて発行した定期刊行物として知られているが、何百枚もの写真の焼付けに要する時間を節約するために、同じ被写体を何枚ものネガに撮って利用した。同じ日付けの誌面でも、バージョンにより、写真だけは異なっていたことが知られている。グリフィスが米国に持ち帰ったものはラトガース大学のグリフィス・コレクション中にもいいはずだが、現在散逸して、残念ながら問題の日付けの号のページはないそうである。グリフィス自身が研究のために抜き取ったり、切り抜いたりしたと見られる。別の種類のグリフィス・コレクションを所蔵するコーネル大学にも問い合わせている。一方、横浜開港資料館や横浜美術館、同志社大学に所蔵されるものは、1965年に徳川林政史研究所所蔵のものを使い、1999年に天理大学所蔵のものを使って出版された雄松堂書店の二種類の復刻版にある写真と同じである。今回見出された、これらの二種類の「説教所」の写真は「The Far East」の別バージョンの存在の一例となる。

最後に、本当の「成仏寺」の写真の所在について述べる。明治学院大学が昭和2年に発行した「明治学院五十年史」に、瓦屋根の本堂の写真が載っている。また、高谷氏が残した瓦屋根の門と本堂の写真が同大学に所蔵されている。これは恐らく、SRブラウンやヘボンの調査のために高谷氏が渡米した際に、彼らの家族が持っていた写真を複写して来たものと考えられる。さらに決定的と思われる写真がベネット自身が出した「Photography in

Japan」と「Old Japan(No.34)」にある。1860 - 61年ころウィルソンが撮影したステレオ写真の中に、本堂前で撮った、SRブラウン、シモンズ、ヘボンら宣教師の家族の集合写真と思しきものが含まれている。屋根の形状やドイツ語のキャプション「Ameri. protest. Mission zu Kanagawa」からほぼ間違いのないであろう。以上の調査・考察から、従来から考えられて来たいろいろな風説は覆ったと言える。先ず、残存する写真やヘボンらの証言から「成仏寺」の門と本堂は瓦屋根である。ホールが写真の撮影を行った証拠は存在しない。グリフィスの記述は間違いである。その原因は「The Far East」の勘違いにある。SRブラウンの娘ジュリアはもちろん、ブラウン自身やホールが1860年代初頭に下岡蓮杖に写真術を教えた事実はないのである。 (平成20年1月20日)



成仏寺門前

高谷道長氏より寄贈写真 いっく最新が不明

From post box, Mission in Nagasaki

